



第3回 電気のふるさと フォトコンテスト

審査 結果



「朝の吉野山」

岡本 聖さん

撮影地域：奈良県吉野町

花の吉野山を俯瞰した大きな風景作品である。前夜の雨が上がり雲海がたなびく中に花の吉野山が堂々と捉えられている。

ブルーのベールをかけたような色彩や陰影描写など気象条件に恵まれたこともあるが、早朝に小高い丘まで足を運んでの撮影は見事な結果をもたらした。

この写真は年に1回撮れるかどうかという、とっておきの1枚である。



最優秀賞

「浮橋」 水島 脩行さん

撮影地域：東京都奥多摩町

奥多摩湖に架かる浮橋を高い所から俯瞰している。白く明るく目立つ浮橋であるが、画面内に曲線で描くことにより存在感を適度に弱めている。浮橋上の人物の配置が重なることなく、画面の下半分にウェイトをかけた構成は見事である。

写真を見た人を「ここに行ってみよう」という気にさせる写真である。



優秀賞



総評

本コンテストも第3回を迎え、応募方法が見極められるようになったためか、全体に作品の質的な向上が見られた。

このコンテストは「電源地域」という限られた地域での撮影が条件であり、題材は地域の人々の日常生活や誇りにしている風景である。

応募者の皆さんは「何を訴えるか」という狙いを定めるのに苦労されたと思う。確かにどこにでもありそうな風景写真も多かった。しかし、その一方で人々の生活、地域の祭り、特有の風景など、電源地域の魅力が伝わる「テーマ性」のある作品も多く、今回の入賞作品はいずれも撮影者の「独自のテーマ」が伝わる力作だった。



優秀賞

「日向ぼっこ」 能川 慎弥さん

撮影地域：山梨県甲州市

甲州市塩山で秋に撮影された作品で枯露柿(ころがき)が逆光で輝いている。建物の隙間から撮影したトンネル構図が適切であり、2人の子供に視線が強く注がれる構図となっており、撮影者の工夫の余地が見られる。

また、暖かい日差しの描写が見事になされており、電源地域である農村ののどかさが感じられる。



選評

審査委員長
森村 進さん



東京都出身。日本大学卒。カメラメーカー勤務を経てフリーになる。各地の写真愛好家の指導に当たる一方、風景写真をテーマにした作家活動を積極的に行っている。

国内での写真展「花火曼荼羅」(ニコンサロン)、「大空と大地のコンチェルト」(ニコンサロン)をはじめ、「日本の花火」をニューヨーク、チューリッヒ、北京で開催。

著書は「35ミリ一眼レフカメラ塾」「デジタル一眼レフの極意」(学習研究社刊)、「ネイチャーフォト自由自在」(毎日新聞社刊)など多数。日本写真家協会(JPS)会員。